

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	高齢腹膜透析患者の在宅療養における病診連携の実践
演者名	平林あゆみ 荒井久美子 奥田純 清水悠紀 生天目裕子 英裕雄
所属	新宿ヒロクリニック

【目的】 高齢腎不全患者に対する腹膜透析治療 (PD) は、QOL を高め有用であるが、適切な病診連携が必要となる。在宅療養支援を継続している症例についてその実践を報告する。

【実践内容】 70~80 歳代男性の 3 例。妻が介護者で PD を導入し、病院退院後より在宅医として在宅療養支援を継続中。透析管理は病院外来、日常の体調管理、透析トラブルなどに対して在宅医が対応。外来毎に報告書による病診連携を実践。出口部感染、腹膜炎、排液不良などに対して、在宅スタッフで外来受診や入院適応を判断した上で、病院へ連絡し、入院加療を適切に依頼。退院前カンファレンスを行うことで早期かつ円滑な退院移行を実践。

70 歳代女性。夫が主介護者。左片麻痺・経鼻胃管で全介助状態のため、頻回の通院が困難で PD 管理も含めて訪問診療を継続中。半年ごとに連携病院に 1 週間程度の検査入院を依頼し、家族の介護負担軽減に努めている。

平成 26 年 7 月基幹病院で開催された高齢腎不全病診連携セミナーに出席。A 氏について、病院側と在宅側の各々の視点で、現象学を用いて症例検討を行った。

【実践効果】 病診連携をそれぞれの役割を認識した上で適切に行うことで、高齢 PD 患者の在宅療養支援を安定して行うことが可能となっている。当院の在宅療養支援期間は平均 2.1 か月となっている。

セミナー参加者約 50 名のアンケート結果からは、共通の患者さんに対する意見交換をすることで、個を診る医療の再認識・各機関の役割の認識が進んだと高い評価が得られた。

【考察】 高齢者腎不全に対する PD 治療は有益であるが、病状や療養環境変化が経過中に見られる。病診連携においては、患者・家族の QOL 向上のために共通の認識を持って、各機関の役割を分担し、連携を円滑に行う必要がある。現象学を用いた共通認識、役割分担を理解するためのセミナーやカンファレンスは非常に有用である。